

京都大学理学部地質学鉱物学教室所蔵の 現生板鰐類標本について

久 家 直 之*

サメやエイなどの板鰐類の化石は日本各地の海成層より知られている。これらの化石を研究するにあたっての障害のひとつは比較する現生標本が乏しいということである。

京都大学理学部地質学鉱物学教室には大正時代に収集した顎標本が約40個あり、今回この標本を

* 京都大学理学部地質学鉱物学教室

** これらの標本を研究のため御覧になりたい方は同教室標本係まで申しこまれたい。

整理したのでここにリストをかかげたい**。

これらの標本は大正三年秋および四年春に東京帝国大学理学部の田中茂穂氏を通じて収集したものであり、当時の東京市場に水あげされたサメの一部らしい。

標本はすべて乾燥した顎標本である。ラベルには体長・産地の記録はほとんどない。また当時と分類あるいは種名の異なるものも多く、ラベルを紛失したものもある。このため今回各標本について種名の再検討を行なった。

Specimens list of recent Elasmobranch in Kyoto University

登録番号	学 名	和 名	備考 (♂, ♀, 体重他)
R 91001	<i>Heptranchias perlo</i>	エドアブラザメ	♀
R 91002	<i>Hexanchus griseus</i>	カグラザメ	四十五貫 (約 170 kg)
R 91003	<i>Chlamydoselachus anguineus</i>	ラブカ	♀
R 91004	<i>Heterodontus japonicus</i>	ネコザメ	♀
R 91005	<i>Sphyrna makarran</i> ?	ヒラシュモクザメ ?	
R 91006	"	"	
R 91007	<i>Sphyrna</i> sp.		
R 91008	<i>Lamna ditropis</i>	ネズミザメ	
R 91009	"	"	
R 91010	<i>Isurus oxyrinchus</i>	アオザメ	♂
R 91011	"	"	♂
R 91012	"	"	
R 91013	"	"	
R 91014	"	"	
R 91015	"	"	
R 91016	"	"	
R 91017	<i>I. oxyrinchus</i> ?	アオザメ ?	
R 91018	<i>I.</i> sp.		体長約 4.6 m, インド洋産
R 91019	<i>Alopias pelagicus</i> ?	ニタリ ?	
R 91020	<i>A. vulpinus</i>	マオナガ	
R 91021	<i>A. vulpinus</i> ?	マオナガ ?	♀

R 91022	<i>A. superciliosus</i>	ハチワレ	♀,四十五貫(約 170 kg)
R 91023	"	"	
R 91024	<i>Mustelus</i> sp.		
R 91025	<i>Triakis scyllia</i>	ドチザメ	
R 91026	<i>Rhizoprionodon</i> sp.		♀,二十八貫(約 100 kg)
R 91027	<i>Carcharhinus</i> sp.		
R 91028	"		
R 91029	"		
R 91030	"		
R 91031	"		
R 91032	<i>Prionace glauca</i>	ヨシキリザメ	
R 91033	"	"	
R 91034	<i>Galeocerdo cuvier</i>	イタチザメ	
R 91035	<i>Squalus acanthias</i> ?	アブラツノザメ ?	
R 91036	"	"	
R 91037	<i>Cirrhigaleus barbifer</i> ?	ヒゲツノザメ ?	五貫目 (約 20 kg)
R 91038	<i>Lepidorhinus squamulosus</i> ?	ビロウドザメ ?	
R 91039	<i>Somniosus pacificus</i> ?	オンデンザメ	
R 91040	<i>Squatina</i> sp.		
R 91041	"		
R 91042	<i>Rhinobatos schlegeli</i>	サカタザメ	
R 91043	<i>Rhynchobatos djiddensis</i>	トンガリ	♂,五貫 (約 20 kg)

(1979年4月17日受理)

(論文紹介)

Andrews, P., W. R. Hamilton and P. J. Whybrow (1978) :

Dryopithecines from the Miocene of Saudi Arabia. Nature, 274, 249 - 251.

ドリオピテクス (*Dryopithecus*) は、主に中新世前期から鮮新世前期にかけて生存した類人猿で、現在の人類や類人猿の共通の祖先と考えられ、その下顎大臼歯はドリオピテクス型 (*Dryopithecus* pattern) といわれるヒト科 (*Homoidea*) に特徴的な形態を示す。また、ドリオピテクス亜科はドリオピテクス (*Dryopithecus*, 主にヨーロッパに分布), シヴァピテクス (*Sivapithecus*, 主にインドに分布), プロコンスル (*Proconsul*, 主にアフリカに分布) の3亜属に分けられ (Simon and Pilbeam, 1965), このうちプロコンスルは他の2亜属より古く、祖先型と考えられている。

この論文は、サウジアラビアより発見されたドリオピテクスに属する5個の化石について記載し、その意義を考察している。発見された化石は、第3小臼歯から第2大臼歯がついた左上顎片1個と、分離した歯が4本 (M^3 , dp^4 , dc^1 , P^4) で、 P^4 は他

の標本と別種になる可能性があると述べている。この標本の重要性はその時代と地理的位置である。標本を産出した地層は東アフリカのプロコンスルを主に産する地層より新しく、おそらくはシヴァピテクスを産する地層と同時代であると考えられるが、シヴァピテクスとは異なった形質をいくつか持ち、全体としてはより古い時代のドリオピテクス (プロコンスル) に類似するとしている。この標本の発見で、中新世におけるアフリカのドリオピテクスの分布は大きく広がることになるが、サウジアラビア付近はアフリカとユーラシアの間の移動路に近かったにもかかわらず、発見された標本が同時代のシヴァピテクスとあまり関連性がないことは重要な意味があり、おそらくこの標本は後の類人猿の系統に直接関与しなかった、ドリオピテクスの初期のころののひとつの分枝であろうと考察している (笹川一郎)